

MEETING REPORT

ISICR Meetingに参加して

実験動物研究施設 教務職員

田川 陽一

帰りに寄ったアトランタのストーンマウンテンにて

11月6日から11日に、アメリカ、メリーランド州のボルチモアで開かれたISICR (International Society for Interferon and Cytokine Research) の1995年 Annual Meetingに参加しました。幸いにも、医科学研究所国際交流基金の援助を頂いて行くことができましたことを深く感謝致します。私は、IFN- γ ノックアウトマウスを用いてConA誘導肝炎の発症にはIFN- γ が重要な役割を担っており、IFN- γ が肝臓の細胞をアポトーシスに導くことを報告しました。

私は、発生工学を利用した個体レベルでのサイトカインの機能解析をしておりますので、そのような視点によりご紹介しますが、多くのノックアウトマウスやトランスジェニックマウスが作製され、解析が進んでおりました。Silvermannのグループは、2-5A合成酵素によって活性化されるRNaseL遺伝子のノックアウトマウスを作製しましたが、今のところホモ接合体は得られていないとのこと、本当に得られないとなると非常に興味深いと思われます。Schreiberのグループは、STAT1遺伝子のノックアウトマウスの作製を試みましたが、残念ながら完全なノックアウトマウスにならず、SH2ドメインのあるカルボキシル



末端側のタンパク質が産生され、わずかながらの活性も残っているとのことでした。ノックアウトマウスを作製する際には、このようなことがないように十分に検討しなくてはならないことを再認識させられました。そのほかにも、STAT3、p48 (ISGF3 γ)、CIITAなどのノックアウトマウスなどが、新たに報告され、今後の機能解析の進展が待たれます。また、既に作製が報告されているノックアウトマウスを用いて、さらに解析の進んだ発表も数多くありました。

初めての海外であったことと、ボルチモアは大変に危険な都市だと聞いたこと

もあり、気の小さい私は、学会会場でもあり宿泊場所でもあるホテルからほとんど外出しませんでした。もう少し、冒険をしても良かったかなと今頃になって後悔しております。この医科研Nowでは、みなさん学会発表しましたという証憑写真を載せていますので、ポスターの前での写真を撮ってもらったのですが、カメラマンがワインの飲み過ぎでカメラを忘れてきてしまったそうで(誰だ?)、残念ながら私の勇姿をみなさんにお見せできないのが残念です。

編集後記

年が改まり、ネズミ年となりました。ネズミは実験動物としてわれわれになじみ深い動物です。最近、トランスジェニックやノックアウトマウスなどを通じて一段と実験動物としての重要性が増しています。こうした研究の一端はMeeting reportにも現れています。

医科研には勝木先生が新たに赴任され、この方面の研究が一層強化されました。これも新しい研究の方向を見すえてのことでしょう。21世紀ももうすぐです。21世紀の医科研に向けての動きも感じられる新年です。この一年が皆様にもよい年でありますように。